

資 料

「《翻訳》ロラン夫人「ブザンソン・アカデミー懸賞論文：男性／人間をよりよいものにするために女性の教育はどのように貢献できるか？」」

後 藤 浩 子

《資料解説》

1793年11月、二人の女性がパリで断頭台の露と消えた。オランプ・ド・グージュとロラン夫人である。グージュのほうはすでに光が当てられ、フェミニズム思想史の中に特筆すべき重要性をもって位置づけられているが、ロラン夫人のほうは、その知名度のわりに、その思想は黙殺されてきた。本稿では、フェミニズム思想の端緒ともいえるこのロラン夫人の1777年の論文を紹介したい。

1793年にグージュとロラン夫人が亡くなったことは、フェミニズムの思想史に一種の歪曲収差をもたらしてきた。メアリ・ウルストンクラフトの『女性の権利の擁護』が突出した基準点となり、彼女の立論の特色である理性に基づく男女平等、そして権利の平等が、初期のフェミニズム思想の典型的要素として分析された。言い換えれば、女性も「男性」と同じ、もしくは「男性」にひけをとらない、主体としての性質を身に着けることができる、という主張である。

ところが、グージュやロラン夫人の議論はあくまでも女性に定位している。男性／人間 (les hommes) の仲間に入ろうなどという野心はみせず、当事者として女性 (les femmes) という別物の基準を打ち立てようとするのである。輝かしいフランス・フェミニズムの源流がそこにある。しかし、彼女達の思考のブレイクスルーは、逮捕と処刑によって葬り去られた。彼女達の命を奪ったのは、パリの蜂起セクションの暴走した暴力^{フォース}だった。この箍が外れたフェミサイドの権力が、どんな可能性を含んだ貴重な芽を押しつぶしたのか、これを思想史研究は明らかにする必要があるだろう。

ロラン夫人は、1791年、リヨンから憲法制定国民議会に派遣された夫ジャン＝マリー (Jean-Marie Roland) に同伴してパリに上京した。パリで生まれ育った彼女にとっては久

しぶりの帰郷であった。彼女がサロンを開き、ジャン=マリーとともに革命下での政治の中枢に関わったのは、2年弱ほどのごく僅かな期間である。しかし、ジャン=マリーがジロンド派の中心的メンバーとなり、1792年3月に内務大臣に、そして同年の8月10日事件による王権停止後の立法議会で再度内務大臣に就任し、革命の権力闘争の渦中にいた期間、ロラン夫人は傑出した援助を授けて彼をサポートした。これを示すダントンの有名な発言がある。内務大臣辞任の意思を示していたロランがそれを翻した9月29日の国民公会で、ダントンは言い放った。「もしあなた方がロランに大臣職を再提供すると決めるのであれば、それをロラン夫人にも同様に提供したほうがいい¹⁾」。

ここで、とりわけロラン夫人の協力の具体例として紹介したいのは、ルーブル宮殿の「ミュージアム」化構想での、内相ロランとかつての王立絵画彫刻アカデミー関係者である画家、美術批評家、絵画修復家達といった美術専門家集団とのミュージアム理念における対立というエピソードである。1792年10月にロランは、5人のほぼ無名の芸術家、1人の数学者からなるミュージアム委員会を指名したが、これに美術専門家集団は反発した。この委員会構成の対立の根源には、「ミュージアム」とは何かについての相違があった。ロランは次のように答弁している。「ルーブルのギャラリーにミュージアムを作る問題、これは布告されています。内務大臣として私はその組織者であり、監督であります。その勘定は国民に負っています。以上が法の本質であり、また法の字面でもあります。このミュージアムは国民が素描や絵画、彫刻、その他の美術モニュメントの形で所有している大いなる富裕さの展開となるに違いありません。私が思うに、このミュージアムは外国人を引きつけ、彼らの注目を一身に集めることでしょう。そして、美術のセンスを培い、美術愛好家を再び作り出し、学校として芸術家に役立つでしよう²⁾。そして、この煙幕を張るかのような答弁の背後で、ミュージアム委員会は、博物学的な部門と美術批評・美術史的な部門が統合されたミュージアム観、言い換えれば、自然と文化（芸術）が対立することなく連続している自然史観を持って、展示物の取捨選択にあたっていたのである。これは、同時期にミュージアム委員が文部委員会メンバーに宛てた報告書にも明らかである。「ミュージアムはただ絵画や彫刻、素描、版画などの傑作を収蔵するだけであってはならず、創意工夫に富んだ役立つ機械や自然学や天文学、光学の器具をも収蔵しなければならない³⁾。機械類を展示する小部屋を準備しなければならないというロランのルーブル宮改築の進捗状況の説明は、実際にこのミュージアム理念を彼が実現しようとしていたことを示している。ここには、次の世紀のサンシモン主義的博覧会の思想、つまり万物の陳列・展示の萌芽さえ見られる。このミュージアム理念に基づいて、ロランは、ミュージアムを美術ギャラリーと解して総攻撃をかけてくる美術専門家集団と四つに組んで渡り合ったのである。

工業監督官だった彼の前歴を考えれば、産業技術展示への志向は推察できるとしても、それを百科全書的博物学の要素と結びつけて「ミュージアム」の理念を打ち立てるのはそうそうできることではない。内務大臣就任中であればなおさらである。いったいどのようにして可能だったのか。この筆者の疑問に答えてくれたのが、ロラン夫人の監獄での手記だった。結婚した1780年に、ジャン＝マリーは新しい製造業の規則を策定するためパリに滞在していた。彼は、パリの王立科学アカデミーに提出する説明書を作成し、夫人はその推敲を手伝った。「私は、その時、博物学と植物学の講座を受けていました。それらの講座は、私の主婦と秘書としての労働を軽減する気晴らしでした」⁴⁾。さらに、アミアンで、1790年に出版されることになる『分野別体系的百科全書』の「製造業、技芸、職業」の項目をジャン＝マリーは執筆したが、これについても、夫人は「夫は新しい百科全書のかなりの部分を引き受けましたが、休みなく彼の仕事を共有しながら、私は母と看護婦としても活動しました」と述べている⁵⁾。ここから、産業技術についての夫との協働と気分転換の博物学探究というロラン夫人の経験が背景にあつての「ミュージアム」論であつたことがわかる。

ロラン夫人についての研究は、20歳違いの夫ジャン＝マリーとの結婚の内実を探る視点⁶⁾からなされている伝記的なものが多いが、書簡や手記が伝えるのは、ジャン＝マリーとの協働や彼に同伴した旅先での見聞が、マノン・フィリポン⁷⁾をロラン夫人に成長させたということである。工業監督官として、国内やヨーロッパのあちこちに派遣されるジャン＝マリーは、旅先での工場視察などの見聞を子細に手紙にしたため、結婚以前からマノンに送っている。また、結婚後は、イギリスやスイスへの出張に夫人を同伴している。まさに、彼らの生涯は、二人三脚での旅路だった。

このようなロラン夫人が、結婚前の1777年2月、マノン・フィリポン時代に書いた最初の論文が、ブザンソン・アカデミーに提出した懸賞論文である。彼女は、獄中での手稿の後半で、この論文に言及している。

「ブザンソン・アカデミーが懸賞論文の課題として以下のような問題を出しました。「男性／人間をよりよいものにするために女性の教育はどのように貢献できるか？」私の想像力は羽ばたきました。私はペンをとって論考を大急ぎで書き上げ、匿名で送りましたが、察するに、それは賞に値しないと判定されたようです。誰も懸賞の栄誉に与りませんでした。翌年もその課題は改めて出されましたが、私はどんな結果になったのか知りません。でも、思い返しますと、この問題を論じたいとは願いつつも、私には、一般的な風紀 (mœur) は政治形態によって決まるのに、これと切り離して教育の在り方を決定するのは、道理に合わないと思われました。一方の性が他方の性によって改革されると敢えて主張するべきではなく、善き法をもって人類をよりよくすると主張すべきと思

いました。したがって、私は私見で女性がどのようにあるべきかを論述しましたが、でも、女性達がそのようになるのは、物事の新しい秩序が結果的にそれをもたらさない限り不可能である、とも付け加えたのです。この考え方はまったく正しく哲学的ではありませんが、アカデミーの目的には合いませんでした。私は問題を解決するのではなく、問題そのものを熟考したのです。」⁸⁾

彼女は、この論文をド・スブランジュ (de Sevelinges) 氏に送ったが、彼からの所見はただ文体だけに限られていたこと、そしてその後彼女自身がこの論文のまさに基礎の部分に大きな欠陥があると気づいたことを書き加えている。「私は、面白がって、それをあたかも、心底から笑い飛ばしたい他人の著作であるかのように批判しました」⁹⁾。彼女自身が気づいた基礎の部分の重大な欠陥とは何だったのか。当時のフランス啓蒙の思潮と彼女の手紙から推察すると、優しさと感受性が女性の本質的特徴であるとした彼女の立論の大前提ではないかと思われる。感覚を通して得られる印象の認識における重要性や感覚と身体との関係は、エルヴェシウスやディドロを始めとする当時のフィロゾーフの議論的であった。しかも1775年5月の手紙で、「ライプニッツ」と「唯物論者エルヴェシウス」の名を挙げつつ、彼女自身、魂と身体の問題に触れている¹⁰⁾。にもかかわらず、彼女は、それらの論点吟味を省略して、優しさと感受性が、社会形成に不可欠の善き情操形成に及ぼす重要性を論じているからである。「マノンの関心を最も引いたのは、ディドロの感受性であった」とS.レイノルズは指摘しているが¹¹⁾、マノンがディドロの『私生児との対話』を読んで賛同している手紙では、感受性には言及されていない¹²⁾、また、身体と結びつき、しかも制御しうるディドロ的感受性と彼女のそれはさほど重なり合わないと思われる。

現代の判定基準からすれば、「本質主義」「良妻賢母の勧め」として切り捨てられる可能性もある論文だが、マノン・フィリボンが、印象、感受性、情操という概念を駆使して描写している女性といういわば他者に開かれた存在の在り方、そしてそれが母子関係に始まる人間の紐帯となり、社会を形成するという主張は、看過されてはならない論点である。「この感受性は、他者の喜びと苦しみを共有することで私達を他者のなかに存在させる、と彼女は述べ、この他者の快苦の共有が「身勝手な自我や個人的利己心の卑劣さを根絶し…共通の願いに服従することで…すべての人間／男性を結び付けながら、満足のゆくハーモニーを作り出す」と結論するのである。

これまで、ロラン夫人の思想の分析では、もっぱらルソーの影響が強調されてきた¹³⁾。例えば、L.H.ウォーカーは、ルソーの『新エロイズ』のジュリの表象の中に「母的自己犠牲に依存している女性的徳の物語」を見出し、これをロラン夫人の手記に重ねている¹⁴⁾。確かに、ルソーの作品が「女性」を語ることへの誘因となったことは否定できない。しかし、彼

女の懸賞論文での主張からすれば、彼女がルソーの女性観をそのまま受容したわけではなく、そこにある哲学は異なるのだといえるだろう。先にも指摘したように、感受性によって自己が他に移入する形で自己拡大が生じるのが女性的徳であり、人間であれ自然であれ、自己の外にある対象への移入がなければ、自己は空っぽなまま、というのが彼女の主張である。他者の中に自己を存在させ、そこに自己を再び見出す、と彼女は主張する。「彼らは日々が彼ら自身から取り去るものを子供達の中でその都度取り戻す」。したがって、それはウォーカーがいうような自己犠牲のマゾヒズムではない。むしろリプロダクションの哲学であり、彼女自身の言葉で言えば、「自然の目的」「自然の諸作用」なのである。フェミニズムが従来の「人間＝男性」観を書き換える試みであるとすれば、ロラン夫人のこの論文は間違いなくその基点に位置づけられるものであろう。

また、手記で言及されている「一般的な風紀は政治形態によって決まる」という見解だが、実際に懸賞論文では、スパルタ共和政を支えた情操と当時のフランスのそれとの違いの例を挙げて論じられている。その際、徳は情操を導くもの、いわばヴェーバー的エートスのようなものとしてとらえられ、スパルタの女性においては勇敢さによって獲得される荣誉という徳の理念が情操の導き手であったが、当時のフランスでの情操の掛け金は自己の名誉という徳であると分析されている。システムの社会観に加え、それを機能させる因子として徳の理念と情操が置かれている点が興味深い。

以上、この懸賞論文のコンテキスト、そしてロラン夫人に関する先行研究の若干に言及したが、彼女が展開している情操と感受性の議論は、ブリテンでは当時の哲学と文学のトレンドであった点を最後に確認しておきたい。

アダム・スミスは1759年に『道徳情操論』を出版したが、そこで感受性は非常に重要な意味を持っている。スミスは、情操の在り方は本能や自然によってのみ規定されているのではなく、感受性の有無によって大きく異なると考えた。文明社会では、分業と交換という相互行為や演劇や文学などの文芸、そして地域的に異なる慣習によって、感受性が培われる。未開状態では感受性はない。感受性とは評判や利益など自分自身の事柄について、あるいは他人の諸感情について感知する能力である。スミスは鋭敏で繊細な感受性に支えられた情操を道徳の基礎とし、このような感受性こそが自然の諸感情を統制する役割を果たすと述べている。「最も完全な徳を備えた人、我々が自然に最も愛し尊敬する人は、自分の当初の感情や利己的な感情の極めて完全な抑制に、他人の当初の感情や共感的感情に対する最も繊細な感受性を結び付ける人である。…他人の喜びや悲しみに対して最も繊細な感受性を持つ人は、彼自身の喜びや悲しみに対する最も完全な統制を獲得するのに最も適している」¹⁵⁾。

ところがその後、感受性という観念にスミスのそれとは異なった意味が付け加わった。ス

ミスは、読書や演劇が感受性を育成することに確かに触れているが、この育成を女性に特化しているわけではないし、その教育的機能を強調してもいない。しかし、イングランドでは1770年代以降、演劇や小説による感受性育成という情操教育が、出版業での廉価小説の販売と相まって情操文学センチメンタル・リテラチャーとして流行した¹⁶⁾。この流行は軽薄な模造の感受性を生み出すものとして当時大いに問題視された。

フランスでは、デイドロが演劇との関係で感受性について論じ、先に見たようにロラン夫人もそれを読んではいるが、むしろ彼女の感受性と情操の概念はかなりスミスのそれに類似している。スミスの著作への言及はなく、直接の影響関係はたどれないにせよ、当時のフランスでの『道徳情操論』の影響力は一考に値する。ちなみに、彼女が懸賞論文を執筆する以前、『道徳情操論』の仏語訳は1764年にエドゥス (Marc-Antoine Eidous) 訳が、1774-75年にブラヴェ (Jean-Louis Blavet) 訳が出版されている。また、ロラン夫人の感受性と情操への着目は、ソフィー・コンドルセによる『道徳情操論』(1798年出版) 翻訳に新たな思想的意味を付け加えるだろう。ソフィーは自筆の「共感 (sympathy)」批判論を付して、出版しているのである¹⁷⁾。

なお、以下に訳出した論文は、*Mémoires de Madame Roland: Écrits durant sa Captivité Tome II*, M.P.Faugère (ed.), Paris :Librairie de L.Hachette, 1864, pp.333-357 掲載の“DISCOURS: Comment l'éducation des femmes pourrait contribuer à rendre les hommes meilleurs”を底本にしたものである。文中の〔 〕は訳者による。

論文「ブザンソン・アカデミーによって提案された問題について」

男性／人間をよりよいものにするために女性の教育はどのように貢献できるか？

情操は私の案内役です。私にとっては、情操は才気と才能の代わりになりうるのです。

ブザンソン・アカデミーによって提案された問題に触発されて、しかも賛同を得ることは非常に自尊心を満足させるものなのでこれに値する栄誉に心惹かれて、私は勇気を出して、私の隠居所からおずおずと未熟な発言をいたします。

たとえ成功すると努力の続行が忌避されるものだとしても、自らの動機によって気高くなった努力は決して失われないものです。私の努力が私に自分の力を知らしめるにつれて、私に知らされるものが自分の力をいっそう疑う術だけの場合でも、私は、自分の努力を後悔

しないでしよう。

活発な競争心が魂に強力な熱を吹き込むのは、まさに人生の春においてです。大胆な試みがより容易く許される時にこそ、この熱は向こう見ずな企てを引き起こすのです。若く、孤立していても感受性が強いとすれば、私は、太陽の柔らかな光線へと舞い上がろうとしつともごちない、まだ弱々しい鳥の飛翔に似た飛躍を遂げます。自然がこの鳥の唯一の教師です。はたして私はそこから最も良い教師を選ぶことができるのでしょうか。私達の知と私達の光を確かに定着させ拡張し、またそれらどちらをも強固にし、鍛え、結合すべきより多くの観念と比較すべきより多くの結果を付け加えて、さらに無数の対象についての私達の判断を根拠づけ保証するのは、まさに少数の人間によって輝かしくも骨折って共有されている学識の役目でした。しかし、主としてかなり直接的に風紀（mœurs）に起因する物事においては情操（sentiments）¹⁸⁾の幸運な直感が学識に啓かれた目を時々補うことができるとすれば、かつて情操が常に風紀の規則と原則であったように、情操が風紀を評価し判断する主体でなければならないのです。

人類の愛おしい部分が他の部分の幸福に及ぼす影響ほど、情操の支配力（empire）に依存しているものはまたありません。その影響力の重要な結果があなた方の関心の的となっているので、殿方、あなた方は、男性／人間をよりよいものにするために女性の教育はどのように貢献できるかを探究することを今日提案したのです。これは興味深い問いで、これを私は、善行をなすと思いがることなく、大胆にも精査しますが、私の競争者達の勝利を熱烈に喝采する心づもりはできています。

なぜ私達にはそれを楽しむのに忙殺されるものを手に入れようとする必要があるのでしょうか。空疎な輝きが鉄鎖を美化して私達がそれを断ち切るのを妨げ、偏見の奴隷は、そのような鉄鎖の下に屈従している、と私達は嘆きます。完成可能性という特有の特性によって、感じやすさという特性の分類の中で私達は第一列に置かれるのですが、この完成可能性は私達の悪の領域を拡張するのに役立つにすぎないとも言えるでしょう。そのよりよい結果である社会そのものが、人間達を互いに接近させ、彼ら間のコミュニケーション関係を緊密化し、コミュニケーションをより必要なものにすると同時に、墮落と過ちが社会の利点のために大して犠牲を払っていないのではないかとしばしば疑うよう仕向けました。私達が多様な運動の結合から衝突、混乱、平衡や、恐ろしいもしくは優雅なすべての現象が生じるのを見るように、関係と知識の多様性から同時に利益の対立、趣味、技芸、デリカシーと悪徳も生じます。

しかし、社会に伴う不都合を認めるほど十分誠実でありつつも、私達は社会に対して福利の恩義があります。この福利を正しく評価しないほど恩知らずではないようにしましょう。

社会によって啓蒙された情操からこそ、私達は社会が生み出した害悪の救済策を学ぶのです。この情操を使ってこそ、私達は、自然を観察しつつ、それに従って行動しなければならない諸原理を再び示すことができるのです。

自然の進行は、ほぼ常に、自然が定めている目的を私達に知らせます。自然が女性達に与えた傾向性を観察することによってこそ、私は自分が以下のことを見出せると思いました。すなわち、男性達をよりよいものにし、より幸福にするために、自然は女性のそのような傾向性を形成したこと、そして、自然は、その結果、この気高く感動的な目的 (destination) を満たすために必要なすべての性質を女性達に与えたことです。私はこの論文の第一部でこれを証明するよう努力します。事実を提示してから、私は教育がどのように自然的傾向性を補佐しなければならないかを探究します。これが第二部の目的になるでしょう。

女性 (les femmes) は男性／人間 (les hommes) をよりよいものにし、より幸福にする宿命にあります。自然の諸作用によって明らかにされた自然の目的こそ、教育が模範にして従わなければならないものです。以上が、私が走破するつもり計画です。

第一部

私が行いたいのは弁明 (apologie) ではありません。私に言わせれば、弁明は場違いでしょう。そのうえ、空疎な称賛が私の性〔である女性〕の榮譽 (gloire) と結びつくとは思いません。とはいえ、個人的な考察だから、それが真理に対して私が心からの純粋な敬意を表するのをどうしても妨げてしまうとも思いません。弁論する当事者だけがこの訴訟の場に存在できる以上、どの当事者かなどそんなことはどうでもいいのです。そして、もし〔人間という〕種の中にこの訴訟の関心の的ではなかった存在が唯一いるとすれば、当事者であるかもしれない良き判事のような〔つまり公正な判断を下せる立場にない〕その人に災いあれ！

土地を手段にして獲得したい成果を生み出す場合、正確に作業をすすめるためには、まず耕作したい土地の特性を知る必要があります。同様に女性の教育においても第一に自然の働きを研究する必要があるように私には思われます。もし自然の目的が私達の欲求が向かうところと同一となることがあるならば、私達は、自然の作用の仕方のなかには私達が従うべき手本があるとすぐにも悟るでしょうし、技芸はもう自然が生み出した幸福な諸萌芽の忠実な発達にすぎなくなるでしょう。こういうわけで、確かな手がかりの教えを受ける裕福な農業従事者は、喜びをもって、そこで発見することが最も重要である諸性質をその地所のなかに識別しながら、自然の富裕な姿に微笑みかけ、自然に熟達した手を貸すのです。

男性をそれ自体で考えるにせよ、彼と同胞との諸関係において考えるにせよ、私達は、優しく感じやすい妻との社交が、彼一人だけを彼にとって可能な完成の段階に到達させること、そして、この社交は彼の存在の補完であり、彼の喜びの源泉として、彼の徳の土台であることを見出します。

ある存在の善良さはその特性の適合性の中に、つまり、彼を構成し、彼を組み立てている諸部分の対応関係の中にその本質があります。したがって、男性／人間の個人的善良さは、彼の本質を形成している能力と愛情の循環構造に存します。

彼の周囲の人々との関係の適切さと服従から生じるのは、相対的な善良さであって、それは社会的人間の善良さです。ここでいう服従は、立法の原理を作り出し、この立法の効果は、社会の個々の独自の利益によって生み出される、全体の最大の利益でなければなりません。女性の助けは男性／人間がこの二種の善良さを獲得するのに不可欠である、と私は思います。推論と経験は私がそれを証明する助けになるでしょう。

行動し、感じ、思考するために作られたのですから、男性／人間はこれらの能力を行使することで幸福なのであり、それらの能力が伸びるにしたがってより多くを体験したのです。

自然の助けを感覚と欲求 (besoin) によって引き出す場合、一方での指示と他方での懇願 (solicitation) がその第一の導き手になります。感覚と欲求によって、彼はかわるがわる欲望を懐いては、歓喜に浸るのです。幸福と悲惨には共通の起源があります。欲求がそれらを存在させるのです。欲求だけが幸福と悲惨をむさぼり、絶え間なくそれらを再生産するのです。

欲求によって照らされて、男性／人間は知る前に感覚し、考える前に行動します。欲求に類似した対象の現前はそれだけで彼を満足させ、楽しませます。まもなく経験とその記憶は、その経験の存在と楽しさを、思い出と予想と確信によって二重化します。欲求が完全に発達することによって、ついに、欲求を固定し増やす抗しがたい性向が生まれます。その段階まで、そのような欲求の発達に気づくことなく、孤立して、男性／人間はあてずっぽうに生きていたか、より正確に言えば、生きることを学んでいたのです。一日一日が次の日のための学校なのです。彼は自分の周囲のもので自分を試し、自分の視線の先に現れる対象の多様な特徴を識別していたのです。その時、彼は自分自身と区別され、自分を見つめ、自分を試みます。ぞっとするような空隙が彼の心の中に感じられ、彼は第二の自分が新しい原則を彼の活動に与え、新しい目的を彼の努力に、そして受け取りうる全エネルギーを愛情に与えるその瞬間までは、みじめで悩ましい状態です。自然を隠しているボールが彼の目の前で引き裂かれ、情操が自然を活気づけ、自然を彩ると、個々の物事が、その瞬間までは持っていなかった魅力を身に着けたかのように見え、すべてが活気づき、美しくなります。もっとも

程よいつながりで彼自身の存在と結びつけられると、物事は彼にとってより貴重で高価なものになります。自分のために選んだ対象に向かうように彼を駆り立てる活発な関心が増大し、彼を取り巻く全てのものに関心を振り分けます。つまり、彼は愛するのです。彼は二度生きます。宇宙は、美が支配し、至福を行き渡らせている寺院になります。

父親という資格が夫の名に加わります。新しい関係が樹立され、社会が出来上がって広がり、この社会を誕生させる要素はさらに社会の維持に役立ちます。

性の最初の勝利は性の優美さによって社会にもたらされました。しかし、優美さそのものは自らの支配力の寿命を優しさから借りているにすぎません。優美さを伴っているのはこの優しさであって、優美さは、それを大事にする人々にこの優しさを吹き込むのに役立っているのです。この優しさという性質はいわば女性達の王笏ですが、これは、自分達の弱さの埋め合わせとして彼女達に付与されているように思われます。この性質は、それを生み出す感受性と並んで、女性達を区別する本質的特徴ですが、これを女性のすべての長所の源泉であると見なすのは止めにしておきましょう。優しさと感受性のどちらも女性達が心を魅了し、〔人間の〕性向を導き、風紀において厳しさを柔和さに置き換える武器です。女性達は、人々を指揮するというよりはむしろ人々を美的に感化するのに適しているのです。花はその輝きによって喜ばれ、それが期待させる果実のため愛でられますが、女性達にはこのような花の繊細さがあります。ひ弱な体格なので、大規模なオペレーション、抽象的な観念 (ideas) は、等しく彼女達には無縁です。力強い努力、または深い瞑想を必要とするものはすべて彼女達の管轄内にはありません。

殿方、ここで、もっと巧みな手法を必要とするでしょう対比を行わずとも、私は、ある場所を簡単に一瞥するだけで両性の特性の違いを判るのに十分であると判断します。

重要な仕事や骨の折れる活動にふり充てられているので、男性はそれらに従事するのに必要な力と頑張りに恵まれています。男性は行動するためのより多くの手段や能力を持っています。彼らの柔らかく筋肉質の肢体は、自在に負荷の重さや動作がもたらす疲労に耐えられます。パッションの激烈さは男性に、思考における精神の高揚、計画における大胆さ、見地における広がりを与えます。彼らの逞しい腕はまさに大地から共同の必需品をもぎ取るために大地のただ中を探し回らなければならないのです。産業を作り出し、進展する産業に従事し、進歩を促進し、社会を指揮し、法を制定するべきは男性のほうです。立法者と支配者である男性は自分に従って行動すると思っている一方で、秘密の力が彼を変化させ、彼を喜ばしい印象や情操の魅力によって導きます。

男性は権威 (les empires) を支配し、女性は心を統治します。女性の影響の第一の効果は、活気あり温和なエモーションへの傾向であり、これは同時に最も純粋な悦楽と社会的徳

の源泉になるものです。見捨てられた大地に向けられた日光の洞察力ある眼差しが、春のあ
る晴れた日に、生命の原理を目覚めさせるように。この原理が駆動させる生命の運動が草木
を成長させ、それを美しくし飾る善き作用を再生するのです。

すべての傾向のなかで、最も高貴で有益なのは、苦情に注意深く耳を貸し、心底から苦悩
の話を聞き、慈善の励ましを傷口に注ぎながら、私達と似た存在の苦しみに同情するよう私
達を仕向ける傾向です。この傾向が、弱さと欲求をもつ人間集団にとって不可欠なものだと
すれば、この傾向の源泉は、苦しむために生まれたように思われる性に属しているに違いな
いでしょう。

女性達は生まれてすぐに、その生涯の繊細な糸をたちまち切ってしまうかもしれない危険
に晒されるので、彼女達はただ母親になることができるという栄誉の、あるいは既に母親に
なったという名誉の、代償を苦悩で支払うためだけに呼吸しているのだ、と言えるでしょ
う。まさにあらゆる種類の危険な障害物を通り抜けて、女性達はよろめきながら思春期が自
分達に人生の門戸を開く期日〔出産予定日〕にたどり着くのです。女性達が自然から預かっ
たものを返して、新しい存在を生み出すのは、まさにゆっくりとした名状しがたい激痛のな
かです。彼女達は苦境に足を踏み入れながら花の種をまいているにすぎず、しかも、それ
は身体の弱まりを伴ってのことです。輝く成功に伴う危険をものともしないほどの、贅沢を
好む熱意を持ち合わせてはいない場合、彼女達は、苦しみのなかで養われて、穏やかに試練
に耐え、試練をのり超える不屈の忍耐を習得するのです。そしてしまいは、絶望の危機を
静め、絶望が度を超すのを未然に防ぎ、絶望の激しさを消し去ることができる物静かで謙虚
な毅然とした態度を習得するのです。苦痛に慣れ親しむと、うめき声は彼女達に習慣化した
センセーションを呼び起こし、彼女達の魂にまで浸透し、魂を動揺させ、引き裂きます。女
性達は必然的に自分と不幸な人間を同一視するのです。彼女達の痛みは固有のものになり、
彼女達は苦悩を被り、もはやそれら苦悩を和らげる欲求しか知覚しません。彼女達のまさに
弱さが非常に感動的で不可欠な徳を生み出すのはまさにこのようにしてなのです。

その運命と特権を私が共有していますみなさま、あなた方が感受性の涙を注ぐ地の表面で
一瞬際立っているみなさま、あなた方は、私達を苦しみの犠牲にした手、しかもこの苦しみ
のなかに、世界の幸福が恩恵を受けている徳の萌芽を据えた逞しい手をたたえるために、私
に加わるのでしょうか！他方の中にある幸福な性向を発達させていく能力が、あなた方自身
がもっている長所と結合されないことなど、おそらくほとんどなかったのです。双方の結集
は、天の計らいの最も顕著な恩恵です。

幸福な性向を発達させていく能力がより際立って自らを共有するよう仕向ける先は、情操
の習慣です。壮健で積極果敢であり、自身の欲望に流されやすく、欲望の満たし方が暴力的

な人間／男性は、もし愛がその胸中に哀れみを持ち込まなかったとすれば、決して哀れみを知ることはなかったのでしょうか？ ある対象に対する優しい愛着は（*tendre attachement*）その種を慈しみ、その質を分かち合います。人はその自然／本性と同化し、そのような愛着によって穏やかになるのです。このように、弱いほうの性は、他方の欲望を固定し、関係を多重化し、彼のパッションを、魅力とこの魅力が彼の中に引き起こすパッションの効用によって、ちょうど均衡するように保つことで、他方の性の完成に役立つのです。自然は、自然が女性達より優れたものにした人々の福利（*bien*）により効果があるよう女性達を働かせるためだけに、女性を第二ランクに置いたように思われます。そして、女性達が抱くそれらの人々の印象上の率直さは、後者が持ちうる善良さと享受しうる幸福の尺度なのです。率直さが一国民の徳と至福の尺度であるように。

仮に私達が歴史上の様々な時代や地球上の様々な国を見て回るとすれば、ある民族の女性の状態が、その民族とその風紀について考えなければならない内容を決定づけるのがわかるでしょう。女性達が尊敬されていたところでは、風紀は常に善きものでした。そのような場所である一般的なゲルマン人地域では、女性達は、為すべき自らの義務に対する極めて大きい忠実さゆえに獲得された格別の敬意を享受していたので、名誉と飾り気のなさに随伴する誠実さと率直さを保ちました。この誠実さと率直さはタキトゥスによって描写されるにふさわしく、後代の人々によって感嘆されるにふさわしいものです。自分とは別種の対象に対して一部の人は思慮分別を表明していましたが、古代の幾多の政体における奴隷制は、そのような思慮分別に属する暗部です。この権力乱用がそれに続いてまた別の乱用を引き起こし、この新たな乱用が相変わらず自然に反することを考えると、この権力乱用にはまったくもって憎悪を覚えます。つまり、私が言いたいのは、ポリガミーが存在するあらゆる所で想像される、ぞっとするような〔風紀の〕毀損についてです。嫉妬深いポリガミーは、対抗者に引けをとらない厳格な管理者を必要とするのです。

もしそれほど幽閉されていない女性達が、彼女達の身体を隷属させるように魂をも退化させる専制のもとで生きることをやめたとすれば、おそらく過度に称賛されているある民族に属す嬰兒殺しの残虐行為が非難されなければならなくなったことでしょう。非常にほめそやされている中国人の国では、最もあさましい利益が、毎日、最も残酷なやり方で優しい犠牲者達をいけにえとして捧げるのです。その犠牲者の深刻な危機は他の場所で自然を震え上がらせます。しかし、どのようにして自然が、自分の第一の代弁者が沈黙に追いやられ、捕らわれの身となって衰弱している国で、心にしみる自らの声を聞こえるようにすることができるのでしょうか。

もし、征服欲の強い立法者によって設立された帝国が同じ嫌悪すべきことを示すとすれ

ば、なんとという善の貧しさがそこに感じられることでしょう。後宮へと追いやられた女性達が、鉄鎖で打ちのめされて、自分達のはかない実在に耐えて生きているところではどこでも、野蛮の鎗が彼女達の高慢な主人を覆いつくし、双方の生気をまとめて失わせます。徳の芽を絶滅し、情操の松明を消し、喜びの源泉を涸らすのはまさにディスポティズムの毒気ある吐息なのです。

私達に新世界の発見を提供する奇妙で驚くべきショーの最中であって、自分達を穏和にしてくれるはずの人類の半分に対する、残りの半分の粗野で愚かな無関心を生み出す不幸と害悪の新世界は、やはり際立ったものの一つでした。残忍さ、怠惰、残酷さは、他よりも退化し諸徳を開花させる情操に到達不能だったゆえに徳をもつことができなかつた人達の中の害悪を示していました。

この一般的で簡潔な考察に、私は、魂が無気力になって決して感動することができなかつた個々人の不幸な性格についての観察を付け加えることができるでしょう。活動停止によって変質したよどんだ水のように、それ自身に集中させられると、魂はただ悪意ある影響力をもち、腐敗をしまい込むだけなのです。

道徳における情操は、物理学における運動にあたるものです。情操の欠如は再びカオスをもたらします。情操は必要な原動力であって、それなしにはすべてが衰弱して死にます。女性達は情操の動力源であって、彼女達の努力はすべて情操を正当な目標、秩序とそれに続く至福に向かうように導くことを目指さなくてはならないのです。情操を発達させ、操縦する宿命にあつて、女性達はそのためにただ最上級の情操そのものだけをうけとつたのです。自然が採用した方法は私達が選択しなければならない方法です。あなた方は人間／男性をよりよいものにしたいのですか。であれば、女性達のなかに彼女達の本質に起因する貴重な感受性を培ってください。この感受性は、他者の喜びと苦しみを共有することで私達を他者のなかに存在させて、身勝手な自我や個人的利己心の卑劣さを根絶します。そして、この共有は、共通の願いに服従することで、こうしてすべての人間／男性を結び付けながら、満足のゆくハーモニーを作り出すのです。よりよい政府はこのハーモニーの輪郭をまだ示し始めたにすぎません。

したがって、女性達は、その自然が定めた目的において、人間／男性をよりよいものにするための係を担当させられているのです。彼女達だけが人間／男性を親密にさせ、愛情を呼び起こすのです。この愛情は、彼らの自由な執務に必要な和合を他の人間の中にもたらしめます。私達は、女性達が生み出す印象の中に、社会とそれを望ましいものにするすべての善の根源を見出しました。そして、彼女達の能力を軽蔑することや彼女達の権利を忘却することのなかに、社会を分裂させ歪める恐怖の源泉を見出しました。私達自身の国では、私達は、

民事身分の不可避の革命によって女性の主要な目標からそらされたので¹⁹⁾、どのようにして自然に対して与えられた損害を教育が修復できるかを模索しています。教育の観察は、私達に以下のことを発見させました。すなわち、教育は、その効果においていかに甚大であってもその方法においては常に変わらず単純なのであり、人類の一方の幸福のために他方が有用であるのは、後者を前者から分かつ弱さそのもの、つまり後者を特徴づける感受性の結果であって、そしてこのことから、この感受性の拡張と使用こそ教育が携わらなければならない直接的目的であるとわかる、ということです。私達の探究が到達しなければならない点のある意味で決定するこの見解に教示されて、到るべき終着点を定めたので、私は、その終着点へと導くはずの方法を吟味することに移ります。

第二部

感じる事、それは心を動かされることです。例えば、その印象からよみがえってくる楽しさや有用性などによって諸対象は私達に影響を及ぼす価値をもちますが、このような対象に対して活発に存在する能力が生じる限りでのみ、この能力をひとつの善きことのようにみなすことができます。さもなければ、まさに弱さは、ものの有為転変に私達を従属させ、私達をより微々たる転変に翻弄されるよう仕向けます。私達をいわばより多くの場所に近づきやすくすることで、私達の活動領域を広げ、目に見える世界のニュアンスを変化させ、私たちの現存—この現存しているという奥深い情操は真の喜びを構成します—を何度も通知するのは、まさに組織 (organization) のある特定の鋭敏さです。情操が生み出す悩み、嫌気、心痛は、感覚の麻痺や精神の怠惰、そして老齢の虚しさだけから生み出されるものではありません。私が言う鋭敏さはそれらに対する予防として役立ちますが、しかし、ある面で不都合な点をもつ可能性があります。鋭敏さが感じさせる頻繁な大変革という不都合と、鋭敏さが産出しうるだろう幼稚さという不都合です。一方は、鋭敏さの過剰から生じ、他方は、鋭敏さの乱用から生じます。両方ともに未然に防がれるか矯正されなければなりません。そして、この仕事は教育の仕事です。自然の秩序と慣習の秩序に従って私達が占めなければならない場所を適切に満たすように、習慣の力で、そして権威のくびきのもとで、私達に心構えさせるのは、教育なのです。知性的な主人のたゆまぬ手入れによって陶冶された若い木は、自分の好きなようにしなやかな小枝を伸ばし、ずっと先に力強い若芽を吹き出したり、あるいは幼年時代に枝を柔らかくにたわませたりするものです。

詩人達が詠った黄金時代、そしてフィロゾーフ達が描写した自然状態—その最後のものはおそらくもはや彼岸にしか存在しません—では、徳は平易なものであったかあるいは知ら

れていなかったもので、徳が努力を求めることはありませんでした。欲求がほとんどなく、所有物もなく、したがって法もないか、さもなければ、非常に少数でどうしても必要なものだけしかないとすれば、どんな不和の原因がなおも見いだされるでしょうか。そして、利害の衝突がないところでは、正義と不正義という名称がない場合のように徳は実践されないままなのです。その場合、変な諸制度によってまだ堕落させられていない情操に教えられるので、人間／男性は、穏やかな無知に包まれて憂いなき日々を過ごし、犯罪によって決して曇らされることはなかったのです。社会の絆によって近づきあい、結合され、より多くの義務を課された状態で、人間／男性はそれらの義務を果たす誠実さを保っていたのでしょうか。人間／男性は完全性の時期にあったのです。しかし、幸福と同様に、思慮分別は、分割不能な点であるように思われます。この点から向こう側へと移るのはたやすいのですが、同時にそこにたどり着くのは困難なのです。

諸義務を生み出し強化する関係の多様性は、私達がそれら関係を楽しむのを時折妨げます。私達は、それら義務の周りを絶えずまわっているのです。そして、経験は私達におそらくいつか、私達の不完全で偏狭な本性に対して義務が存在するのは勇気を私たちに鼓舞し、魂を培うといった活動を期待してのことにすぎない、と教えるでしょう。交差する光線の多様性が一つの束に結集して消え去るように、この経験という反駁できない審判官が判断の多様性を取り除くのを待ちながら、私達は、人生の行程の中にちりばめられているように見える矛盾と間違いにもかかわらず、その行程で前進するに足るほどに、ほんの一時啓蒙されます。社会は、諸情操が集まっては妨げあう一つの家庭です。そこでは、諸思想が伝播し、広がります。そこでは、個々人が生み出す小さな部分が、一つの全体的塊を形成し、この全体的塊のめいめいの取り分は増大するのです。社会の真ん中に生まれる人々にとってはまさに、そこで役に立つようになるという責務は決定的なものになり、その責務を果たそうと気を配ることに一生涯従事するのです。

しかし、この責務に応える方法はすべての人に同じではありません。私達に適した方法の研究は、私達の第一の課題、つまり、私達の子供を育て、導く人間の一番の課題です。女性達はより早く育成されるので、特別な配慮を必要とします。すべての印象を受容する余地があるので、彼女達は痕跡が最も軽い印象さえも消去されないままにするのです。生まれつき感受性が強いという彼女達が持っている長所は、世の中に流布ししばしば最良の頭脳の中の最も簡潔な真理観さえ歪める誤った思想に囲まれると、懸念すべき危険な障害物になります。伴侶と母といった、女性達がいつの日かそのもとに存在しなければならない二つの関係を考える場合、彼女達の責務は重大であると同時に多様であり、公正さに劣らず判断力も必要とします。

彼女達の定められた目的についての知識、つまり目的の重要性の感情は、私には彼女達の教育の動機であるように見えます。彼女達の精神の全能力と彼女達の魂の全感受性がある方向に導かれなければならない二つの対象があります。自然からさほど遠ざけられておらず総じてまだ簡素さをもったままである人々においては、自然によってすでに示されているその目標に達するのは容易でしょう。しかし、現代において、生活様式、偏見といった条件が伴うと、事は簡単でしょうか？私は、先立つ世紀を過度に称賛することで今世紀を風刺する嫉妬深い偏執は持ち合わせていません。全ての人々が固有の欠点をもっているように、それらの世紀にはそれぞれ固有の害悪があったのです。私は、先立つ世紀の私達の王政のさまざまな時代を思い起こすと、私達が生きている時代に生まれるよりむしろその時代に生まれたほうがよいただ一つの時代を他の時代から識別することができるかどうかわかりません。哲学は私達を啓蒙し、理性は私達を教育します。天才はその恩恵を私達に振りまき、才能ある人々は私達に彼らの傑作を惜しみなく与え、芸術は私達に娯楽を与えましたが、徳がより雄弁で高貴な口調で知らされたことなど決してありません。人間性はようやく守護者と伝道者を、そして真理は崇拜者を見出すのです。私達は、アテナイの優美さと趣味とスパルタの峻厳な言語を併せ持っています。私達には、今日のソクラテスとデモステネス、ソフォクレス、プラクシテレスがいます。風紀を除けば、私達にはすべてがあるのです。この場合、風紀がそれらを完成させる多くの方法によっていかに善く存在可能であろうとも、という意味で言っているのですが、非常に顧みられず非常に効き目のあるものの一つが、真の原則に立ち戻った女性の教育でしょう。しかし、有害な連鎖によって、諸悪習は相互に生まれ合い、悪習を根絶するために用いられる努力と一緒に抵抗します。正しい分別や本物の趣味、そして狂気による逸脱や役立たずの虚無を避けるために必要な健全な理念が、私達にもたらされることが大変困難であるのは、まさに軽薄さが私達の心を捉え、その輝きが私達に強い印象を与え、注意力の散漫が私達を魅了し、すべてが私達へのそれらの影響力を強化するように一致して作用するからです。

王侯をほめそやすごとくにおだてられると、王侯と同様に、私達は大勢のおべっか使いをもっているが、多くの場合友人はいないという不幸に陥ります。賞賛の魅惑的なささやきが私達の周りで聞こえるやいなや、私達は関心を持ち始めるのです。感じがよいが取るに足らない人間に賞賛が与えられると、それによって私達の注意は彼らに向けられ、私達は物事の本当の価値について思い違いをします。私達に賞賛をもたらした些細な楽しい思いによって絶えず賞賛に値することに関わるようになると、私達のまなざしは分裂し、偏狭になり、虚栄心の幻想がある意味で私達の感受性を収縮させ枯渇させるか、もしくは感受性をそれに値しない数々の対象へと四散させます。気まぐれに導かれ、感覚に制御され、若い頃に崇拜さ

れ、少し後には忘れ去られる場合、私達は、ある迷信を信じる民族がへりくだって敬意を表する対象である偶像と、なにがしかの類似性をもつようになります。彼らはそれらの偶像に恩恵を期待しますが、不運の際にはそれらをなおざりにするか罰したりするのです。

両性の交際に女性を丁重に遇する（galanterie）精神が取り入れられ、好意を懐き合おうとする一般的欲望が掻き立てられている、愛想よく軽薄な民族の国では、女性は活発で、陽気で魅力的でなければなりません。でも、もっぱら楽しんでいたがる男性、しかも女性が理性で獲得したものを思いやりで失うのを見ることを恐れている男性を、彼女達が、よりよくすることができるはずと必ずしも期待できるでしょうか。

まさに立法の原理のなかにこそ、国民的善良さと公共的至福の原則を探し求める必要があります。それはすなわち以下のことです。法の公正さと法の順守の厳格さ、正義に適った苦勞と報いの分配、そして富裕の平等な割り振りです。これらのことは、徳を生み出し、男性／人間を可能な限り善きものに生成させます。女性が受ける教育を決定することで風紀をおのずから変更する第一の諸原因がありますが、風紀に対して女性はせいぜいこの諸原因の影響に従属した影響力をもつにすぎません。普通、家に籠るほどますます内向的になりますが、共和主義政府のもとでは、魂と情操を向上させるパトリオティズムに没頭して、家事に従事しつつも、女性は市民の幸福と国家の幸福のために、努力を傾けます。これは、女性が家の内部で維持する善き秩序と平和を通して、また、子供たちのなかに勇氣と徳の芽を育む女性の気配りを通してなされます。勇氣と徳はともに、自由と並んで永続しなければならないのです。自分の家族に専念する場合、女性は、家庭内で通用し家族を推薦に値するものに育成できるという長所をもつことによって自分自身を愛させることのみを目指し、それ以外の目的を志願できないでしょう。些細なことの評価や空疎な榮譽の追求は、ほとんど浅薄な社会だけにしか存在しません。そのような社会では、各々が社会を維持する実際の功績などないのに思い上がりを持ちこむのです。

あまりにも早期に私達の国の社交界で顔がよく知られると、代表することと好かれることが、女性達に与えられるほぼ唯一の模範例であり、教えられる唯一の事柄であるかのように、彼女達の野心の唯一の対象となります。ある若い女性が自分の尊厳と義務を学び、その重要性を理解し、それを実現することで自分に戻ってくるはずの利点に気づき、尊厳や義務への愛とそれを果たす必要性を確信するのは、無為と自惚れと倦怠で形成されたサークルのただなかにはありません。感受性を鍛えて発達させるはずの、徳への高潔な熱意や慈善への嗜好を彼女に懐かせるのは、陰鬱な氣質の道德家の恒久的で冷やかな教訓でもありません。選良の社会、つまり良く指導された家族に包まれた適度な隠れ家においてこそ、若い苗木と将来の品種の期待、そして現世代の喜びを育成する必要があります。そこでこ

そ、彼らの精神が判断を下すまさにその前に徳の実例が彼らの魂に働きかけ、彼らを取り巻くすべてのものが彼らに慈善への嗜好を与えるよう一致して作用するのです。同じ性向と原則が協働させる、二人の長の緊密な連絡によって幸福になっている家内の生活の光景ほどに、興味深く、真理を愛するようさせるのにより適したものが他にあるでしょうか。相互の尊敬をさらに増大させたがっているのです、彼らは常に、より大いなる公平さ、感情の純粋さ、振る舞いの繊細さ、自信の穏やかさ、愛情の配慮、寛大な行為を実践することで尊敬に値しようと努力するのです。感受性は彼らをその穏やかな温かさで満たし、彼らの善行は、魅了すべき心を探しに行き、善行を務めとして申し出ます。彼らは、世界を自分達の誠実さと結合することを欲しているのです。歲月という指が彼らの額に筋をつけ、彼らの眉を下げ、彼らの身体を曲げさせにくる時、有徳の人々には思い出と希望が慰めになり心地よさを与えるので、それらが彼らを墓石へと導く下りの勾配を和らげるのです。年老いて憂いがない状態にするのは、もっぱら一家の父の役割です。最愛の伴侶の存在は、夜に彼らの視界の近くに立ち込める雲を晴らします。温和な習慣は喪失を埋め合わせ、もはや存在しない喜びの空間を保持します。彼らは日々が彼ら自身から取り去るものを子供達の中でその都度取り戻すのです。彼らのおかげでその人生がある晴れやかな若者達は、彼らの足跡に花を投げます。彼らのひ弱な手は逞しい苗木にもたれかかり、そして、陽が沈みゆく半球上でより鮮やかな色彩をなおも輝かせる夕陽の最期の光線のように、微笑みが彼らの口元に現れます。

単純素朴なイメージは、非常に心にしみるので、間違いなく、そのようなイメージを絶えず眼前に懐いている人々の気質を定着させることができます。しかし、社会の契約は私達に様々な対象を知ることを課すので、これら対象から受け取ることができる未知の印象を前もって知らせるためには、教育がそれらのイメージと結びつかなければなりません。

思うに、かなりありふれた二つの不都合があり、それを女性の教育でも同様に避ける必要があります。一つは、彼女達の精神があまりに顧みられてないこと、もう一つは、彼女達のすべての知識が情操の完成と結びつけられてないことです。

ある偉人が私の前で言いました。軽薄な才女はその夫、そしてその一家の災いである、と。私は、無知な者や愚か者や軽薄な者は、なんら災いではない、と付け加えることができます。活力に満ちた善なる愛は、愛の値段とは異なった見地からのみ生じることでしょう。この見地は必然的に見識ある確固とした判断力、省察する習慣、観察する才能を前提します。

無知が精神に属すということ、それはつまり無分別は身体に属すということです。無知は私達を蒙昧の中に引き留め、行動するのを妨げます。露の欠如が様々な発生が出現するのを妨げるように、理念 (idée) の欠如が情操の広がりをつまらなくさせます。それぞれの理念は新しい一

器官 (un organe) であり、さらには精神のための (pour l'esprit) 感覚なのです。しかし、精神の陶冶 (culture) は心に有益になるようになされなければなりません。とりわけ道徳は女性の学問です。実りのない思弁は、もっぱら想像力を鍛えるのには適していますが、実践への適用が日々絶え間ないものでなければならぬ研究よりもはるかに精神の育成にふさわしくはありません。不完全な存在の幸福を担うことにその定められた目的がある場合、女性達はそのような存在の本性と欠点、パッションと弱さ、そしてそれらの一部を共同の利益に資するように用いつつ、残りの部分がもたらすかもしれない不幸を予防する方法を知る必要があります。性格の穏やかさや巧みな手加減や手慣れた慇懃無礼によって思慮分別を心地よいものにする術を心得る必要があります。彼女達には、日頃の用心、細々した忍耐や、秩序を維持し手はずを整える精神もやはり必要です。これによって、彼女達は家内の権威 (empire domestique) に首尾よく対応できるのです。最初の印象ともっと強力な印象が作られる少なくとも若年期の子供達の教育の責任をとにかく負わされるのですから、女性達は、子ども達の身体を健康で丈夫にする術を心得て、彼らの知性を伸ばし、知性の進歩を助け、知性を啓蒙して前進させ、第一歩目から知性を真理への途上に据えさせる必要があるのです。

もはや、女性の無知が彼女達の徳の守護者であり、思慮分別の保証人であると想像される時代ではありません。敢えてこれを偏見と呼びますが、これはかつてないほど今日では有害となるでしょう。風紀が厳格ではなく、国民が一般的に啓蒙されている場合には、そのような模範例の激流に抵抗するための、それを上回る力が、そしてよりよい原則を採用するための熟慮された知が、必要なのです。

正しく考え善く行動することは、すべての道徳が帰結する二つの規範です。知ることと愛することは、喜びの二つの出発点です。最も完全な幸福は、したがって、幸福をより多く作る人、つまり最もよく考えより多く愛する人に対して存在するはずなのです。

心の中に徳の種をまくために美の手が形成され、女性が自分達の行く先を教えられ、それを達成してすべての功績をなしとげるであろうときに、この幸福は、だんだんと拡大し、より多数の幸福になるでしょう。女性は生まれつき感受性が強いものです。女性が、自分達の魂をより高め、精神をより拡大することでこの感受性を発達させ、それを鍛錬するにふさわしい対象へと感受性を方向付けるであろうときに、彼女達の教育は男性／人間をよりよいものにするのに貢献できることでしょう。様々な利益を結びつける正義の諸原則と慈善の諸情操を自分自身で培うと、女性はそれらを、自然が彼女達に関わる権利を付与した人々の中にももたらします。女性が、彼らの歡心を買うために、徳によって彼らに相応しくならなければならないなくなるやいなや、そして、軽薄な娯楽がもはや愛という裕福なミルトの葉を摘むた

めの唯一の資格ではなくなるやいなや、誠実な妻、優しい母親、見識豊かで謙虚な女性である彼女達は、男性／人間を幸せで善きものにするでしょう。スパルタの女性市民、彼女達はそこでは栄誉の受賞者であり、英雄を作り出していたのですが、私達の国であれば、繊細で寛大な女性が名誉と情操の受賞者となり、男性／人間を育成するでしょう。

かの地では、祖国の熱意が彼女達の想像力を高揚させ、彼女達を完全に満たし、誇り高く勇敢にしていました。この地では、ある温和で敬虔な徳の昇華された興奮が、彼女達に可能なかぎりのすべての善良さを与えつつ、女性達の魂の中に風紀によって実権を握ろうとする高貴な大志を掻き立て、そして、家族の至福が国家の至福を保証する担保になることでしょう。

巧みに詳細に諸教訓を述べるよりはむしろ速やかに諸原則を把握したいので、殿方、あなた方には、ご自身の設問に関係する通覧すべき諸対象の不完全で浅薄な概要だけを提示します。私は、未熟な腕で、あなた方が私達に彩色するために与える絵のいくつかの線を素描しています。それは、謝意によって表現され、喜びによって提示される情操への敬意です。

この課題では私の弱さが勇気を裏切ってしまったかもしれませんが、これが別の人によってよりよく論じられるかもしれないという望みは、私の駆け足の終着点で、慰めになるほのかな光を振りまっています。この光は、陽の光の後になお旅人の最後の歩みを照らし導く柔らかな光に似ています。

《注》

- 1) J.Madival & E.Laurent (eds.), *Archives parlementaires. Recueil complet des débats législatifs et politiques des Chambres françaises, Première série 1787-1799*, vol.52, p.229.
- 2) Jean-Baptiste-Pierre Le Brun, *Réflexions sur le Muséum national*, Edouard Pommier (ed.), Réunion des Musées National, 1992, p.26. 初出は、*Le Moniteur*, t.XIV, n° 296, 22 octobre 1792, p.263.
- 3) *Aux Membres du Comité d'Instruction publique de la Convention National: Commissaires du Muséum Français, Paris, 1793*, p.6.
- 4) *Mémoires de Madame Roland: Écrits durant sa Captivité, Tome II*, M.P.Faugère (ed.), Paris:Librairie de L.Hachette, 1864, p.245.
- 5) *Ibid.*, p.246.
- 6) ロラン夫人がパリ上京後にジロンド派のフランソワ・ビュゾー (François Nicolas Léonard Buzot) と恋愛関係になったことに起因する視点である。
- 7) ロラン夫人の結婚前の名は、マリー=ジャンヌ・フィリボン (Marie-Jeanne Phlipon) だが、夫のロランの名がジャン=マリーで紛らわしいので、通常、マノンという彼女の筆名で呼ばれている。
- 8) *Mémoires de Madame Roland, op.cit.*, pp.228f.
- 9) *Ibid.*, p.230.
- 10) LXXXXV 《À Sophie, le 3 mai 1775》, *Lettres de Madame Roland*. Nouvelle série TomeI: 1767-1780,

ed. Claude Perroud, Paris: Imprimerie Nationale, 1913-1915, p.294.

- 11) Siân Reynolds, *Marriage and Revolution: Monsieur and Madame Roland*, Oxford U.P.2012, p.28
- 12) CXXIV 《À M.Boismorel, le 28 mai 1776》, *Lettres de Madame Roland, op.cit.*, p.419.
- 13) 例えば、Siân Reynolds, *op.cit.*, pp.28-31.
- 14) Lesley H.Walker, “Sweet and Consoling Virtue: The Memoires of Madame Roland”, *Eighteenth-Century Studies*, vol.34. No.3, 2001, pp.403f.
- 15) Adam Smith, *The Theory of Moral Sentiments, The Glasgow edition of the works and correspondence of Adam Smith I*, Oxford U.P., 1976, p.152.
- 16) これについては John Brewer, ‘Sentiment and Sensibility’, in *The Cambridge History of English Romantic Literature*, 2009, Cambridge U. P., pp. 19-44 を参照。
- 17) 懸賞論文は、1795年刊行のロラン夫人の遺稿集 *Appel a L'impartiale Postérité, Par La Citoyenne Roland, Femme Du Ministre De L'intérieur* には掲載されていない。
- 18) Sentiment は一般的な意味では言われている場合は「情操」特定のものを意味している場合は「感情」と訳した。「情操」は陶冶されて形成される感情を意味する。
- 19) フランスにおいて、民事身分はカトリック教会が管理・監督し、カノン法に従って行われていた。カノン法では、神の下での男女の人格的平等の見地が支配的であり、婚姻においては双方に夫婦の義務を定めていた。また、婚姻は秘蹟と位置付けられ、その執行者は両配偶者自身とされたので、両親の同意は必要ではなかった。それが、フランソワ1世以降ルイ14世まで、王権が民事身分の管理・監督に関わる王令を出し、婚姻の自由は制限され、夫権は強化された。とくに絶対王政期に、夫権の強化という傾向が現れる。「女性は、未成年者の無能力制度と同一の思想系列でとらえられ、夫権が女性という男性に劣る性別の劣等性保護の観念に変わり、…夫は夫婦共同体の主人であり主君であるという観念が生まれた」(松本薫子「婚姻法の再定位：フランス民法典の変遷から(1)」『立命館法学』383号、2019年、335頁)。アンシャン・レジーム期の民事身分については、同書第2章第1節(328-348頁)を参照。

